

I 調査地域概況 Umriß der studierten Gegend

調査区域は地形的特性から4区分できる。即ち、1)西部肱川最上流部の盆地区、2)東方に続く多くの支流を集める上流部の低地区、3)両者の南北に位置する法華津山脈および大野山から御在所山にかけての山地区、4)東北端部の大野ヶ原の山地区である。

1) 宇和盆地区

肱川の最上流、卯之町に至るまで、宇和川流域は扇状地をもたない多くの盆地群で特徴づけられる。北から東多田、田苗真土付近、小郷、山田、小原などの山麓集落に囲まれる区域や、野田付近に散在するこれらの盆地は、いずれも、広域に作用している西落ちの地盤運動の影響を受けて、逆傾斜になった範囲が、埋積され、一時的な侵食基準面の安定によって広がったものである。盆地や河川の性格から、扇状地、自然堤防は発達せず、盆地底はほとんど水田化されている。

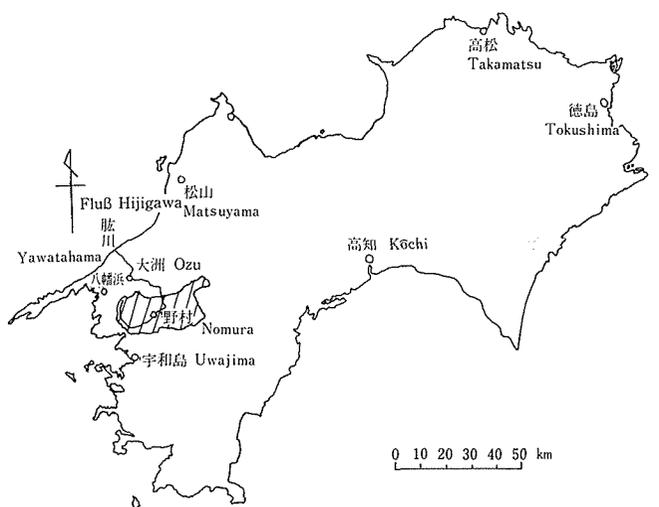


Fig. 1 調査地位置図

Die schraffierte Fläche umfaßt das Untersuchungsgebiet auf Shikoku

2) 肱川上流低地区

肱川主流、支流の低地区や、周辺の山地を中心とする地区である。

肱川主流部は東西方向の造山運動に先行して、かつての地形平坦化時代から流れ続けている河道で、著しい穿入蛇行を示している。これは、河川の下刻量が周辺の隆起量より大きく、原河道が必従されたことによる。それに対し、多くの新しい支流は、東西方向の地質構造や起伏に適従

している。

野村を中心とする盆地は、すぐ下流を横切る抵抗体または最近の上昇軸のために侵食基準面の一時的安定がおこり、形成されたものである。主流部の著しく緩かな勾配を反映して、盆地底は110 mと低位である。市街地東部には段丘が形成されている。

ここでは、谷沿いの低地は水田に、段丘面や山腹緩斜面は宅地や畑に、山麓緩斜面はクリ園に、山間部は植林にと、土地利用が進んでいる。

3) 法華津山脈、大野山～御在所山の山地区

調査地西南部の法華津山脈、西北部の大野山(797 m)、御在所山(669 m)は、いずれも秩父古生層の水成岩で構成され、硬いチャート、石灰岩の条脈が無数に認められる。東西方向の山系は、南北で異なる地質構造の変位差や抵抗差によって形成されたとみなされている。

これらの600～900 mにわたる山稜部には、集落は少なく、スギの植林が顕著である。

4) 大野ヶ原山地区

四国の西の尾根と言われる背梁山地をなし、秩父古生層が南北系の上昇運動によってもちあげられたものである。石灰岩が幅広く挟在し、四国カルストと呼ばれるカルスト地形がみられる。

集落は深い谷間の山村や大野ヶ原開拓村などである。

調査区域の気候は、最寒月1月の平均気温は4℃、最暖月7月は28℃に達し、温暖である。降水量は1500～1800 mm内外で幾分瀬戸内海の寡雨域の影響を受けており、太平洋岸などにくらべてやや少ない。

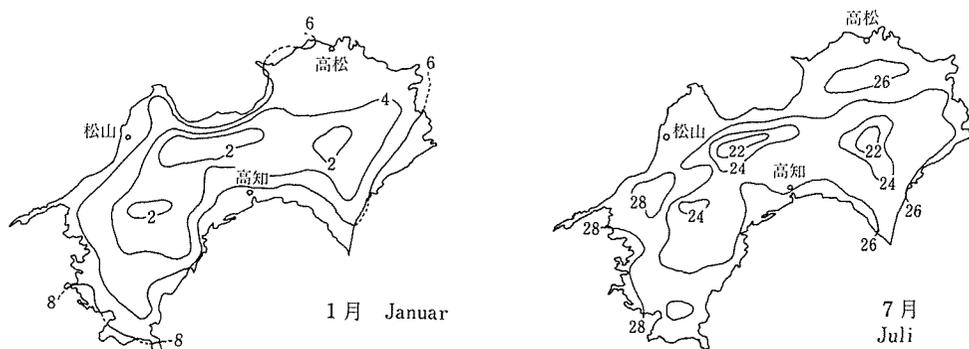


Fig. 2 四国地方の月平均気温分布図 (和達 1958)

Isothermen der Minimum-Temperaturen im Januar und der Maximum-Temperaturen im Juli auf der Insel Shikoku (Wadachi, H. 1958).